「あらすじです。」
（宇宙史）
（リステラス星圏史略）

（講談社投稿用）
（２０１８年）
（草稿＋没原稿～第１稿）

霧樹里守
（きりぎ・りす）

目次

「あらすじです。」. 1
「あらすじ」の梗概。. 2
【　移転　の　お知らせ　】. 3

０　上古神代～四界神話
０.『 上古神代 』. 7
０.『 上古神代 』. 8

（幕間劇　１）（ヤツリーダムの物語）
（幕間劇１）　（ヤツリーダムの物語）. 15
１－０.　ヤツリーダムの物語。. 16

１　涙滴大陸　（前期）
（１．涙滴大陸）（前期）. 23
１－１.　《　神殺し　》。. 24
１－２.　《 碧葉国》の物語。. 27
１－３.　《　谷の一族　》. 30
１－４.　《月女神》信仰。. 33
１－５.《鱗の民》と《谷》の終焉。. 36

（幕間劇　２）
（幕間劇２）. 39
『 ヤツリーダムの物語 ２ 』　（2017 年 6 月 30 日 ＋11 月 3 日）. 40

１　涙滴大陸　（後期）
１.《 涙滴大陸》（後期）. 47
１.《 涙滴大陸》（後期）　（１－６～10.）. 48

（幕間劇　３）
（幕間劇３）. 53
ヤツリーダムの物語　３. 54

２　大地世界の物語
２.《大地世界》の物語. 59
《大地世界》の物語　（※）. 60

3　地球の終わりの物語
3.《地球》の終わりの物語 63
2.『地球の終わりの物語』　2－0. 支族たち。 64
2－1.『間隙時代』の変遷。 66
2－8.『最終戦争』 68

4　美麗天地の物語
4.《美麗天地》の物語 73
3. 美麗天地の物語 74
4.《 リスタルラーナ星間連盟》の設立。 78

5　地球再統一
5. 地球再統一 83
5－1.《 地球 》再統一。 84

6　３界の物語
6. 三千世界の物語 89
6.《三千世界》の物語。 90

（幕間劇　4）
(幕間劇４) 93

7　ジースト世界の物語
7.《ジースト》の物語 97
(※) 98

8　銀河統一の物語～エリスウェサ体制まで
8.《統一銀河》の物語 101
8.《三千世界》時代。 102

（幕間劇　5）
(幕間劇５) 107

9　リズから外へ　～　末法宇宙の物語
9.《 リズ》から外へ。 111
9.《 リズ》から外へ　～　末法宇宙の物語。 112

X　終わらない物語
(※) 117

（草稿＆没原稿）
(草稿＆没原稿) 121
(元原稿) 122

『試験に出る宇宙史』／【INDEX】（2015年4月9日） 123
ヤツリーダムの伝承歌　1 132
ヤツリーダムの伝承歌　2 133
ヤツリーダムの伝承歌　3 134
ヤツリーダムの伝承歌　4 135
ヤツリーダムの伝承歌　5 136
ヤツリーダムの伝承歌　6 137
ヤツリーダムの伝承歌　7 138
ヤツリーダムの伝承歌　8 139

（設定資料）
（設定資料） 143

（借景資料集）
（借景資料集） 147
（借景ＢＧＭ集） 148

奥付
奥付 151

「あらすじです。」

（「あらすじ」です。）

「あらすじ」の梗概。

この本は、とある銀河宇宙の歴史の始まりと終わり...（終わらない）...の物語、です。

対象読者は、まず私。

いじめとネグレクトでどこにも居場所がなく苦しみ、小学２年でリストカットを始めた...私のための、物語。

すべては幻影。

流転する、まぼろしのなかの海。

不登校児として保健室で自習し、小学４年で副教材の「世界人権宣言」を読んで始めて、自分の居場所を持った。「生きていていい」と、言ってもらえた...。

そんな孤独な子どもが、存在することを赦される...

そんな広大な宇宙の、

星のかけらのように小さな魂たちの、

流転し転生する...

歴史の、物語。

【　移転　の　お知らせ　】

☆
☆　超～大幅に！
☆
☆　加筆＆改稿した２０２３年版、
☆
☆　こちらに移転しました。
☆
☆
☆　『　　試験に出る　宇宙史　　』
☆
☆　...《リス テラス 星圏 》史略 概論
☆
☆
☆　　https://novelpia.jp/novel/3862
☆
☆
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

（講談社投稿用）（２０１８年）（草稿）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

0　上古神代～四界神話

０．『上古神代』

０．『上古神代』

０．『 上古神代 』

０．『 上古神代 』

始まりの場所。《 センサリテヤ 》。
時間・空間・重力と、生死と奇蹟と偶然を、超越したところ。
べつの名前を《 究極の青 》とも呼ばれる。
青く蒼い、輝きに満ちた夢幻宮の界。

治めるのは主宰母神〈 マンマ・ワァガ 〉。
すでに姿を持たぬ神。遍自在神とも呼ばれる。

０－０．『 四界神話 』

〈マンマ・ワァガ〉は界卵を産み落とす。
ある時、その数は一度に四つであった。

手に余ると副主宰神〈 レ・リナル 〉はしばし思案し、
界卵を託すため、若き神々を呼集した。

神々の数もまた四つ柱であった。
若き神々らはまた、いまだ姿ある神、とも呼ばれた。

０－１－１．〈 リースヒェン 〉

「謹んで」と、若き姉神〈 リースヒェン 〉は、膝を折って界卵を拝領した。
女神の姿は細く白く丈高く、長く薄い金の髪に瞳は水のごとき淡い蒼であった。

０－１－２．〈 グアヒィギル 〉

「慶んで」と、若き兄神〈 グアヒィギル〉は界卵を掌中におさめた。

男神の姿は黒く丈高く筋隆々たる美丈夫で、黒い巻き毛に黒い瞳であった。

０－１－３.〈 マラィアヌ 〉

「まぁ、嬉しいわ！」
まだ幼き妹神〈 マラィアヌ〉は歓喜にふるえながら界卵を抱きしめた。
この少女神は豊かな緑の巻き毛に碧の瞳。四つ柱の中て最も若き神であった。

０－１－４.〈 ティアスラァル 〉

「無理です」
弟神〈 ティアスラァル〉は畏れて辞退した。
薄茶色の長い髪に薄茶色の瞳の、少年神であったと言われる。

０－２－１.《 エルース・ア・マーリア 》

姉神〈 リースヒェン 〉は界の名を学都《 エルース・ア・マーリア》と定めた。
智と探求を求める神々と仙と精霊とが集い、《光なす内球の界 》とも称した。

０－２－２.《ボル・ド・ガスドム 》

兄神〈 グアヒィギル〉は界の名を戦都《 ボル・ド・ガスドム 》と定めた。
勝利と血を求める神々と獣神と妖霊とが集い、《 焔洞界》とも号した。

０－２－３.《 ダィ・レム・アールス 》

妹神〈 マラィアヌ 〉は界の名を《 ダィ・レム・アールス》と名付けた。
技芸と舞楽を好む神々と神獣と精霊らが集い、《無窮大地》世界と呼んだ。

０－２－４.《 ティ・カーセル・ラース 》

弟神〈 ティアスラァル 〉は再び固辞した。
ゆえに界は大いなる空白、《 ティ・カーセル・ラース 》と呼ばれた。
界卵はひとりで育ち、半神と獣神と妖霊ら闊歩して《泥球界》とあだ名した。

０－３－１．（諍い）

姉神リースヒェンは潔癖にして癇性。
血と騒乱を好むグアヒィギルを忌避し、
ボル・ド・ガスドムの民を遠ざけた。

ボルドムの民は壮麗なる都エルース・ア・マーリアへの訪問を望むも、
「野蛮」とさげすみ、姉神は拒絶した。

０－３－２．（騒乱）

グアヒィギルは怒って天界の天使を退け、
血刀ひっさげ天宮の女神を穢した。

女神は怒って自らの首を斬り落とし、
ボルドムの民はエルシャムの民を穢した。

０－３－３．（侵害）

妹神マライアヌはこれを聞き驚き恐れ、
急ぎ天界へ赴き兄神を諌めるも、
兄神は妹神をも辱め、
ボルドムの民はダレマスの民を襲った。

０－３－４．（終焉）

これを聞き上神レ・リナルは驚き呆れ、
急ぎ大地界へ赴きグアヒィギルを捕縛した。

マライアヌは消沈し、界を閉ざしてセンサリテヤへと還った。

ティアスラァルはただその騒ぎを観ていた。

何もせず、ただ、静かに観ていた。

（幕間劇　１）（ヤツリーダムの物語）

（幕間劇１）　（ヤツリーダムの物語）

（幕間劇１）

（ヤツリーダムの物語）

１－０．　ヤツリーダムの物語。

１－０－０．僭称する《神》。

主界神〈ティアスラァル〉は〈何もせぬ神〉と呼ばれた。
ために《泥球界》ティカーセラスは無法の世界であった。

何をしても咎められぬゆえ、精霊たち妖霊たち、また、力ある悪霊までも自由に往来し、放縦のかぎりをつくした。

何をしても咎められぬゆえ、無秩序、それはむしろつまらなかった。
霊たちはすぐに飽いた。

やがて、最も力ある者、光り輝く者が、自らの身分霊格の低さも省みず〈太陽神〉と僭称し、より弱き者らを従え脅かした。

「力ある者の専横こそが法である」と太陽神は宣した。

これが泥球界での初めの掟となった。

１－０－１．「ヤ・ツリーダム！」（なんて醜い！）

太陽神はいまだに「姿持つ神」であった。性を好み、暴虐を娯楽した。

ある時、気まぐれにひとつの小さな水の精に目をとめ犯した。

泣き叫びながら犯された水の精はやがて一群れの卵を産んだ。

卵から生まれ出た仔らは小さく平たい体に平たい四ツ足と、太く短い尾を持つ姿で、肌

の色はまだらでさだまらず、弱く、歯も牙も爪さえ持たず、ただのたのたと無様に地を這うばかりの姿であった。

「ヤ・ツリーダム！」（なんて醜い！）

その姿を見た太陽神はひとこと吐き捨てると、哭きむせぶ水の精をも見捨てて去った。

それがこの仔らの名前となった。

１－０－２.〈水霊母〉

水の精は困り果てた。

幾万となく生まれた卵塊から孵ったばかりの醜き仔らが、
まもなく次々と苦しみもがき、死に絶え始めたのである。

母は水の精であるので泥水の海の底の底の底で卵を産み護り孵したが、
生まれ出た仔らは空の者である太陽神に似て、
水の中に長く居ることはかなわぬ存在だった。

母は大慌てで口から大いなる泡を吐き、泡の中に生き残った幾千かの仔らをくるんで、
大慌てで海の上の、空とのあわいにまで持ち上げた。

ところが仔らは水面に浮いて泳ぐことさえ長くは出来ぬのだった。

次々ともがき溺れ死ぬ様を見た母は大慌てでまた海の底の底へ戻り、泣きむせび嘆願して弱き仲間らのちからを全て借り集め、海の底の底から泥と岩をこねあげ押し上げて突き固め、なんとか仔らを載せる小さな陸の揺籃を造った。

この愛の働きをもって小さな水の精は力ある水の霊となり、〈水霊母〉と呼ばれた。

１－０－３．剥奪。

ところが水の中からようやくに出た生き残りの幾百かの仔らは、空気のなかでは肌が乾いて、ひび割れて次々に死んでしまうのだった。

地の上にあがれぬ母は水辺から身を乗り出して涙を落とし、弱き小さき仔らの肌を護った。眠る暇さえ惜しんだ。

それを遠くから見かねた父なる太陽神が再び襲い来た。

「来い。それよりはマシな子種を仕込んでやろうぞ！」

母は哭き叫びながら力づくで連れ去られた。飢え乾く幾十匹かの仔らだけが残された。

１－０－４．〈いちばん強い〉と〈いちばん大きい〉

空は無慈悲に乾き、天は無慈悲に照らした。

とり残された仔らはみるみるうちに乾いてゆく泥溜まりの底に身を寄せ合った。

〈いちばん大きい〉と呼ばれるグェップロップは仲間たちと声をかけあった。

「小さいやつを中に入れてやれ。弱いやつは真ん中に入れてやれ！」

干乾びてゆく浅い泥水の底の底を掘り、小さく弱いものらを中に沈めて、大きいものらは交代で外に出て尾の先で、弱いものたちの背なや頭に、泥をかぶせてやるのであった。

やがて、もう自分たち全てが入れるほどの泥の大きさは残っていないと気付いた〈いちばん強い〉グェップラップが言った。

「おれは、母を取り戻せぬか、見て来る。」

沼辺のふちの高い崖を乗り越え、固く乾いた岩漠の果てに、彼は姿を消した。

〈いちばん大きい〉グェップロップは、その大いなる姿で小さく弱いものたちに日陰を造ってやりながら、ただ、去ってゆくグェップラップを、見送るしかなかった。

１－０－５．〈いちばん弱い〉と〈いちばん小さい〉

泣き叫び嫌がる水霊母をふたたび犯して無理矢理に二度目の卵を産ませてはみたが、怒り狂い拒絶するだけの相手をいたぶるのにも飽いて、他の美しい女精に太陽神は気をうつした。

そのすきをついて逃げ出した母が、ようやく戻った。その時。

累々と固まる干乾びたヤツリーダムの遺骸の山の涯て、かろうじて生きて残されていたのは、真ん中の日陰にかたく護られていた〈いちばん小さい〉と〈いちばん弱い〉の弟妹だけだった。

二匹は兄姉の遺骸の肉をはみ血泥をすすって、流す涙すらなく、ただかろうじて震えながら息をしていた。その眼は虚無だった。

母はうずくまり哭きむせび、ただひたすらに太陽神を怨み呪った。

１－０－６．月女神〈レリナルディアイム〉

その母の世の涯てまでもと哭き叫ぶ悲嘆を聞き及び、ようやくに上つ界より月女神〈レリナルディアイム〉が泥球界まで降り来たった。

白銀に光る長い髪に銀に光る鋭い瞳の怜悧なる上界女神は宣した。

「〈太陽神〉と僭称する者よ。おのが身分をわきまえるがよい。

この界のあるじは、〈なにもせぬ神〉ティアスラァルのみである。」

僭称神は怖じ恐れ、下らぬ捨て科白を吐き捨てると、去った。

残されたのは水霊母が二度目に産んだ卵塊の仔らのみであった。

この仔らはやはり海に泳げず空も飛べない父神に似ず翼なき姿の、二足二腕の不具の身でったが、すでに心を病んだ水霊母は、この仔らをかえりみることはなかった。

１－０－７.〈慨嘆の一族〉

〈いちばん小さい〉ガップレップと〈いちばん弱い〉ガップヤップの兄妹は、上界月女神にまもられて《涙滴大陸》の湿気た沼地の穏やかな淵に棲まうこととなり、やがて夫婦となり卵を産んだ。

生まれた新しい仔らを見に訪れた水霊母は喪われた古き仔らに生き写しの姿に再び魂を傷め、

「ヤ・チーダム！」（なんて可哀想な！）と叫んだ。

それが彼らの名前となった。

哀しみのあまり姿を隠した〈水霊母〉は深く深く海の底の底に身を沈めたまま、長く長く仔らの安寧を願いながらも、太陽を呪い続けた。

1　涙滴大陸　（前期）

（1．涙滴大陸）（前期）

1．《 涙滴大陸 》（前期）

１－１．　《　神殺し　》。

１－１.《 神殺し 》。

１－１－０.《名すら無き者》。

長い長い時が経った。

水霊母が太陽神からむりやりに産まされた二度目の卵群は誰からも省みられることなく、ただ地の熱に蒸されて孵り、幼いうちからたがいを憎み、食らいあって育ち、強者が弱者を犯して産ませ、産み捨てられ、見捨てられて育った。

彼らを呼ぶ者とて他になく、彼ら自身もみずからを名乗ることがなかった。

１－１－１.《 袋を持つもの 》

そうして何千代かが過ぎた。

より強くあるために彼らは平たく這いつくばる四ツ足と鱗の姿から、長く伸びた四肢と首と、くちばしと羽毛をもつ姿になった。

より速く逃げ、より確実に仔を護るため、雌たちは腹に卵や袋を持った。

１－１－２.《コ》族。

生きのこるために彼らは記憶と知識を持った。

始まりの言葉が生まれ、語り継がれる物語が生まれた。

仲間と敵の見分けかた、群れること護りあうこと、切り捨て見捨てて生きのびることを学んだ。

最強の者らはやがて自らの仲間を《コ》と名付けた。

産み増えて地に満ちたが心は常に孤独であった。

１－１－３.《 神 》。

長老のまえの長老のそのまたむかしのおおむかしの長老が、この世の始まりには《神 》というものがあったと語り伝えた。

そのような話が記憶の闇に隠れるころ、《コ》族の〈へ〉という者がおとぎ話を笑い飛ばした。

「カミなぞおらぬ。この世の最強は、ただ《コ》族のみ。」

１－１－４.《 天 雷 》

その時、天が轟き、地が裂け揺らめいた。

人々は怖じ恐れて〈へ〉の不敬を罵った。

地が冷え、雨が冷たく白い沙に変わった。

人々は餓え、獣も餓えた。

１－１－５.《 魔 竜 》

ある時、山中より、火のように熱く焦げた息を吐く、巨大な魔獣が現われた。

次々に《コ》族の子や雌を喰らった。

人々は噂した。

「あの恐ろしきモノノケこそが、《 神》というものに違いない...！」

１－１－６.《 神 殺し 》

〈へ〉は嗤い飛ばした。

槍を研ぎ、仕掛け弓を張り巡らし、怯える同族らを叱り飛ばして、ただひと群れで《神 》を襲った。

死闘の末、《 神 》は斃された。

斃した神の肉を喰らって、《コ》族は冬を乗り越えた。

１－１－７.《 神殺しの人王 》

あまたの同族を率い、姦計を用いて、《神》と呼ばれた巨大な魔竜をみごと斃した〈へ〉はその後、《神殺しのコ族の王》〈コ・ヘウ〉と呼ばれた。

それまでバラバラだった《コ》族の全てを束ねる者となり、その眷属がうまれ、彼らは王族と貴族と呼ばれ、やがて庶民と分かれた。

１－２．　《碧葉国》の物語。

１－２.《碧葉国》の物語。

１－２－１．災厄の平石。

《神殺し》たちが数を増やし、姿を増やし、棲む領域を広げに広げたある時。

天空を斜めに切り裂き、燃えさかる大きな平石が墜ちてきた。

平石は燃えさかりながら斜めに墜ちて荒れ狂う北の海面に当たり、墜ちた勢いのままに斜めに二度、三度と飛び跳ねて斜めに進んだ。

大いなる壁のごとき大波が起こり、《神殺し》たちとその眷属とその敵とを全て一息に飲み干した。

飛び跳ねつくした平石は陸に当たって止まり、大いなる熱を発して大地を熔かした。その後へ大波が襲い掛かった。

１－２－２．大寒冷。

波は久しく荒れ狂い、空は暗く荒れ狂い、長く寒い時代が続き、《神殺し》たちは溺れ、餓え、冷えて死んだ。生き残る者は互いにあい喰み、強い者だけが残った。

ようやくに天が開き陽光が戻った時、《神殺し》たちにはほとんど雌と子どもが残らなかった。

ようやくに地が乾き埋もれた平石の周りが冷えた時。

そこから出て来た者たちには、雄がほとんどいなかった。

１－２－３．胎卵の一族。

大いなる燃える平石を《ほしのふね》と呼ぶ美しい雌たちは、《神殺し》たちと取引をした。

交わって、卵を産もう。産んだ卵を温めて、孵そう。

無事に生まれた２つまでは《神殺し》に与えよう。

そして３つから後は《ほしのふね》に貰う。と...。

墜ちてきた雌たちは胎の袋で大いなる卵を孵した。

《神殺し》たちは奇異なる姿の美しい雌たちと喜んで交わり、産み育ての母から新たなる知恵を授けられた賢い仔を得て、更に喜び、やがて再び増えて栄えた。

《ほしのふね》の子孫たちも、やがて地に増えた。

１－２－４．碧葉の樹の国。

《ほしのふね》の子孫たちはやがて地に増え、《ほしのふね》の落ちた周りには大いなる異種の樹林が育った。

子孫たちはその円環の森を《碧葉樹》と呼び、自らの領土を《碧葉国》と号した。

１－２－５．王国の乱立。

《神殺し》たちにはそれまで《 国》という知識がなかった。

土地に壁を築き、土地に名をつけることが流行り、次々に《 国 》が開かれた。

やがて地が動き、気候が動き、冷えた土地から新たに《胎から仔を産む者たち》が移動してきた。

国の数は増え、民の種類も増え、それぞれ栄えた。

１－３．　《　谷の一族　》

１－３.《 谷の一族 》

１－３－１．横穴の民。

ある時、《神殺し》たちは棲むことを好まぬ《実のならぬ大樹の森》の谷に、いちどきに大勢の異形の民がやってきた。

二本の足、二本の腕だが、尾はなく、顔は平たく、牙もなく、毛皮もなくて、羽もなかった。

股の穴から血まみれの赤い仔を産んだ。とにかく数が多かった。

彼らは海の向うではなく、背骨の山の《谷の穴》から来たと称した。

１－３－２．教えの《谷》。

彼らはそのまま《実のならぬ谷》に棲みつきたいと申し出たので、《神殺し》の王たちは嘲笑して許可した。

「虫も獣も果実もない土地ぞ。その人数で、なにを食する？」

民たちは地を掘って虫を捜し出し、川を漁って魚を獲った。

木片で火を起こし、火炎を自在に操った。

《神殺し》たちは仰天して、その技に感嘆し、教えを請うた。

「谷の土地は貸してやる。代わりに、知恵の技を教授せよ。」

そのため《谷》の一族は《教えの民》とも呼ばれ、あらゆる知恵を授けるために、《神殺し》たちが棲む土地へ、入れ替わりで訪れ、旅をした。

１－３－３．凍死と養子。

地は動き、地は裂け、時は移り、命も入れ替わった。

ある時、短い大寒冷が訪れ、卵の者らは跡継ぎを失った。

胎から仔を産む者らだけが残った。

卵の者らは胎仔の者から養子をとり、それぞれの言葉や領土を伝えた。

《谷》の一族から幼い仔を迎える国も多く、やがて大陸の南のなかばは股の穴から赤子を産む者らで満ちた。

１－３－４．《帝国》の成立。

《谷》の者らは無用の争いを好まぬ民だったが、幼くして《神殺し》の養子とされた者らは戦上手となることを望まれた。

《谷》の血筋だが《神殺し》の習俗を身に着けて育った者らは、知恵と野蛮を合せ持ち、姦計を巡らし権力をあい争い、軍を造り国を盗り、領土を増やし、差配する役人を育てた。

やがて、血にまみれた王のなかの王が勝ち残り、《帝国》と号した。

《谷》の一族は、《帝国》への臣従を誓った。

１－４．　《月女神》信仰。

１－４.《月女神》信仰。

１－４－１.《時の横穴》

地は動き、山は育ち、陸は広がり、草木は生えた。

《神殺し》の帝国は気候の温暖な大陸の北の平原に栄え、冷涼で急峻な南の山地には、《谷》からの移住者と、ひとまとめに《他族》と呼ばれる者らが、まばらに棲んでいた。

ある時、ふさがれたはずの《谷の横穴》に女が墜ちて戻らぬ事変があった。

月女神レリナルが天より降り来たりて穴をふさいだ。

「地が動き、蓋がずれた。」と。

１－４－２.《月女神殿》

横穴をふさぎ、見張りの銀の城砦を築き、そこに月女神は住まった。

《谷》の人々はこれを月女神殿と呼び、畏れ敬った。

《神殺し》の一族はこれを心苦く思ったが、帝国版図より遠き南の山塊のことであったゆえ、あえて捨て置いた。

１－４－３.《月女神》信仰。

それまで《神》を持たずにいた《涙滴大陸》の者らはこれを奇に思い、畏れ敬った。

月女神はまたすべての雌と女たちの守護者であるとされ、子宝や離縁を望む者らが遠方より訪れた。

１－４－４．女剣士（ルワ・ヘルマ）と女騎士（ルワ・ブラダ）。

月女神と神殿を詣でる者らを護るために女の剣士と女の騎士がうまれた。

それまで《帝国》において雌と女は泣きながら男に犯され男の子どもを産み育てる為の存在であって決してそれ以上ではなかったが、女剣士と女騎士らが男と互角に闘い得ることを見て、人々の心が変わった。

月女神の守護を受けた女は、すべての男が定める掟から放たれて自由となる、という不文律が創られた。

初代の女騎士（ルワ・ブラダ）の名をリ・リィ＝カタ・ナンという。

奇しくも、時の横穴に墜ちて死んだ者の娘で、《谷》と《碧葉》の血を併せ持ち、金の髪に金の瞳の、白い肌の細い姿であった。

１－４－５．巫女戦士。

《谷》と《帝国》の契約に基づいて献納戦士となった女が、男の戒律を反故にするため月女神に誓いを立て、初の巫女戦士となった。

名をハユンのアマラーサ。黒髪黒瞳、褐色の肌、男勝りの大柄であったと伝える。

大旱魃に際して《谷》の水霊を救い出し、涙滴大陸を護った。

１－４－６．月女神、去る。

大地鳴動し、山脈が隆起した。

「人族は二度と再び横穴に近づけぬ。」と、銀月女神は地界を去った。

女神が残したミトラの教え（三親の法）だけが残り、広く帝国に流布された。

１－５．《鱗の民》と《谷》の終焉。

１－５．《鱗の民》と《谷》の終焉。

１－５－１．《鱗の民》

いつの頃からか帝国の海辺に白い鱗の一族が棲みつき、次第に増え始めた。

彼らは一見柔弱であり狡知に長け、海産物と陸産物との交易で富を得ていたが、《谷》と《帝国》との協和と繁栄を妬み、大陸上をも海族の版図とせんと企んでいた。

１－５－２．《谷》の焼失。

ある時、帝家の後継争いの機に乗じ、帝都帝城は滅ぼされ、《谷》にもまた大火が放たれた。

１－５－３．《帝国》の復仇。

鱗の呪師が放たれ、雨風が続き、大陸は泥に呑まれかけたが、帝家唯一の生き残りの皇子が軍をたて応戦し、これを防いだ。

１－５－４．流転と回生。

やがて鱗の者のみが死に至る流行り病が流れて、あっけなく騒乱は収まった。

復仇の皇子が新帝家を築き、これより帝国は大陸全土を版図とするに至った。

（幕間劇　２）

（幕間劇２）

（幕間劇２）

『ヤツリーダムの物語 2 』　（2017 年 6 月 30 日 +11 月 3 日）

http://85358.diarynote.jp/201706301510338624/

『ヤツリーダムの物語 2 』

2017 年 6 月 30 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 http://85358.diarynote.jp/201706301510338624/

ある嵐の翌朝、太湖のほとりの泥溜まりのほとりで、群れからはぐれたらしい四ツ足の仔が、しきりと鳴き泣きしているのを、通りすがりの二本足の女が聴きとめた。

ちょうど孕んでいた女は幼子が母を求める嘆きを見過ごせず、さりとて辺りを見渡しても春の大雨の後の大増水のさらに大嵐であたり一面の水びたし。その仔が元いた沼が何処であったかなど、とても見分けられそうにない。

しかたなく女は片手でひょいとその仔をつかむとすたすたと自分の家まで戻り、一番大きなたらいに泥水を満たしてその仔を放ち、たまには体を干して日当たりで休めるようにと板を斜めに渡して、泥一面の太湖のほとりでは水草も埋もれて食餌もとれていなかったろうと、海藻の干したものを水でもどして喰わせてやった。

がつがつと喰らったその仔は腹がくちくなるとようやくに鳴きやんで、「...あんにゃ〜！」と、少しようすの違う声をあげ、やがて安心したのかくぅくぅと寝入ってしまった。

女は微笑んで、増水のひいて仔でも生きられるようになるまではのつもりで毎日まいにち、水草をもどしては口元に運んでやったのだった。

http://85358.diarynote.jp/201711032159204669/

（続き）（2017 年 11 月 3 日）

やがて月満ちて女は子を産んだ。からだの辛いあいだは親族や近在の者が入れ替わりやってきては赤子の元気そうな様子を誉め、かがめない女に代わって四ツ足の仔にも餌をやり、泥水を替えてやっては帰っていった。

女は不自由なく歩けるようになるとやがて、まだまだ軽い乳飲み児を背負い、もうずいぶん大きくなった四ツ足をえっこらさと抱え上げて、出水のひいたもとの大河のほとりにまで運んでいってやった。

ところが四ツ足はいやがって女から離れなかった。

「えんにゃー！ えんにゃー！ えんにゃー...ッ！」

...褐色の四ツ足が、どうやら自分のことを実の母と思いこんでしまったらしいと気がついて、女は笑ってため息をつき、またまたえっこらさと抱え上げて家まで戻り、今度は家の前の小さい沼川に、ほいっと四ツ足をはなしてやった。

「もう盥の中では狭いだろう。ここならいつでも逢えるよ」

聞き分けたのか、四ツ足はおとなしく、少し嬉しそうに泥沼のなかへ泳ぎこんでいって、まだ短い尾でぱしゃりと水を叩いた。

それからは餌は自分で水草を摂るようになったが、朝に夕に、陽が昇れば女を起こしに来るし、陽が沈めば女におやすみの挨拶をしに来るのであった。

女はしばらく考えて、二本足の息子には双葉と名付け、四ツ足の息子には、四つ葉と名づけた。

双葉は四つ葉ほどには成長が速くなかったが、人間の子らしい速さで元気にすくすく育ち、やがてすこしでも目を離すと四つ這いでどんどん遠くへ行ってしまうようになった。

普通なら気を抜けないところだったが、なにしろ水辺に墜ちれば四つ葉がすぐに岸辺まですくい上げてくれるし、崖から落ちそうになれば四つ葉が叫んで知らせてくれるして、女はずいぶんらくをさせてもらった。

「こういうのも乳兄弟って言うのかねぇ？」

いつでも一緒の一人と一匹を微笑ましく眺めて、近在の者らは笑いあった。

やがて誰も覚えがないほどの大雨と大水が続いた。

噂では白鱗の魚人族がカとミと秘術を使い、人間の帝国を滅ぼさんと大地の水没を謀っているとのことだった。

誰もなすすべもなく沈みゆく畑を前におろおろし、流される家を後に必死で逃げた。

女たちの集落も水に呑まれた。

泣き叫びながら人間たちは渦にまかれ、泥に沈んだ。

悲鳴は天に響いた。

「.....うんにゃぎゃ、ぎゃぎゃっぎゅ〜ッ...！！」

誰もそれまで聞いたことがなかったほどの大きな大きな吠え声が、四つ葉の喉から溢れた。

二度、三度と、それは天に轟いた。

「.....ぅげろーーーーーーーっぷ！」

遠くから、また反対側から、応える叫びがあがった。

物凄い速さでいくつもの小津波が近づいてきた。

津波と見えたが、それは物凄い速さで泳ぎ寄ってきた、たくさんの、たくさんの、四つ葉の仲間であった。

仲間たちは四つ葉の村の人間たちを一人残らず背に載せて、泳いで泳いで泳いで、まだ乾いていた、残りの小さな島地に載せた。

「.....やっ、ちだも...！」

（なんて御親切に！）

女は涙を流して感謝した。

それからは《ヤチダモ》が、四ツ足たちの新しい名前になった。

双葉と四つ葉は仲良しのまま元気に育ち、それぞれの嫁をもらって、子を産み育て、一族同士は互いに仲良しのまま、末長く栄えた。

１　涙滴大陸　（後期）

１．《 涙滴大陸》（後期）

１．《 涙滴大陸 》（後期）

１．《 涙滴大陸》（後期）　（１－６～10.）

１．《 涙滴大陸 》（後期）

１－６．《石の帝国》

竜種とその《谷》出身の養子たちが大陸各地に散在し、その漠然とした権力関係の集合体をさして《帝国》と称していた時代を後の世には「竜の帝国」と尊称し、白鱗の乱の後の再興帝国は区別して《石の帝国》と呼んだ。

１－７．《谷》の民のその後。

焼失した広大な《谷》から避難した一族はごく一部を除いてひこばえの萌え始めた《森》へ戻ることはなく、生き残った竜尾族と増え続ける二つ足に生きのびるための技術と叡智を伝え、安定して供給される水源の管理法と嵐や地震にも耐え得る石の家の造りかたを教え、それぞれの集落を結んで往来しやすい街道と石造りの都市と、それらを管理する機能的な官僚機構を築いた。

１－８．身分の分割。

やがて二つ足たちはふたつに分かれた。

定住し権力を握り、使役し驕慢に振る舞うもの達と、流浪し旅を愛し、技芸をなりわいとして自由と平等をたっとしとする者たちである。

権力を持つ者たちは持つことを拒否する者たちを蹴散らし、弾圧した。

民は貧富と階層に区分され、自由は制限され、奴隷が売買された。

１－９．四民平等。

やがて藩都ズードリブルより女領主が立ち、女と男との平等を訴えた。

まもなく遼原の火のごとく万人の自由と富と身分の四民平等を説く教えが広がった。

救世主サラ・ティスの世直しが行なわれ、帝都《石》には議会が開かれた。

世は栄え、安定し、出自によらず本人の選択と努力による職業や富が約束された。

１－10．大陸の滅亡。

突然、天空に大いなる暗黒の丸い幻影が現われた。

地の人々はそれを《闇の太陽》と呼び怖れた。

その巨大な円盤は、宙に浮かぶ都市であった。

降り来たる人々は、それを《 光より速い船 》と呼んだ。

船人たちは石の帝国の男を殺し、女を犯し、子どもを産ましめ、その子を奪った。

船の女たちが病により絶滅していた故である。

帝国の男たちは戦いを挑み、殺され、女たちは泣き叫び逃げ惑った。

姦計を用いて《 光より速く飛ぶ》に潜りこんだ子どもらがあった。

内部で暴れた。

巨大なる円盤の船は傾き...落ちた。

大地はありえぬほどに鳴動し、炎上し、開いた大穴からは熔けた大地が溢れ出し、すべてのものが焼けて崩れた。

その跡に生き残ったわずかな人々の上に、はるか天高くそびえる津波が襲い掛かった。

津波の引いた後、大地は泥と氷に沈み、はるか山脈よりも高く深く降り積んだ雪に埋もれた。

これが《水の島》として産まれ、《涙滴大陸》と呼ばれ、《石の帝国》の版図であったアタ・ルアンタイスの、最期であった。

（幕間劇　３）

（幕間劇３）

（幕間劇３）

ヤツリーダムの物語　3

http://85358.diarynote.jp/201711200542515370/

＃＃「ヤツリーダムの物語 3」（携帯から）（11 月 19 日 23 時 47 分）

2017 年 11 月 19 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

天が裂け大地が割れた。
大水が沸き上がり火の玉が森や街に降り落ちた。

飛べる虫と鳥と魚たちは一斉に逃げ出し、泳げる獣たちは海に飛び込んだ。

二本足のうち知恵や権力のある者は我先に港に駆けつけた。

金や武力にものを言わせて我と我が財宝と一族のうちでも気に入った者だけを乗せて残りは蹴散らし、悲鳴と哀願を無視して迅く船を外海に走らせた。

中にはしがみつく貧しい者らに転覆させられる船、恨みから火を放たれ港口を塞いで炎上する船、まさに阿鼻叫喚のちまたであった。

港から遠く、あるいは野山に襲いかかり洗い流す激しい津波に呑まれた二本足たちは、なすすべもなく水に溺れた。

その時、ヤチダモが天に声を放った。

ありとあらゆるヤチダモの仲間たち、大きい者も小さい者も尾のある者も四つ鰭でかく者も、みな急ぎ駈け泳ぎ寄り、溺れる二本足たちをその背に載せた。

荒れ狂う波を掻き分け息もつかずに泳ぎに泳いだ。

泳いで泳いで泳いで泳いだが、火と水に沈み行く涙滴大陸から彼方の未知の大陸へと、浪は荒く高く、水は冷たく時には凍りついて、二本足を載せたままでは水に潜り餌をとることも背中の皮に水をかけることも出来ず、多くのヤチダモたちは半ばで力尽き、屍を舟として、なをも人々を運んだ。

飢え渇いた二本足らは哭きながら死んだヤチダモの干からびた背中の皮を剥いで喰い、脂を燃やして肉を喰い、屍の舟が底の皮しか残らなくなる頃、

ようやくに潮に流されてはるかな砂の大陸へと流された。

これが涙滴大陸の最期の物語であり、砂と岩の大陸の物語の始まりなのであった。

『涙滴大陸』終わり。

２　大地世界の物語

２．《大地世界》の物語

２．《大地世界》の物語

《大地世界》の物語　（※）

（※ 別巻にて詳述。）

３　地球の終わりの物語

3．《地球》の終わりの物語

3．《地球》の終わりの物語

２．『地球の終わりの物語』　２－０．支族たち。

http://85358.diarynote.jp/201711262315578202/

http://85358.diarynote.jp/201711262315578202/

2017 年 11 月 26 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

２．『地球の終わりの物語』

２－０．支族たち。

そのようにして涙滴大陸に栄えた《石の帝国》の二本足たちはごくわずかのみが生き残り、少ない人数ずつに分かれて島々や大陸に散り散りになった。

命からがら未知の岸に辿り着き、そのまま未知の獣や病やその地の巨大で野蛮な毛むくじゃらの二本足らに喰われて終わった者たちも多かった。

生きのび得たごく少数の者らはやがて増え、かつて《谷》の人々が竜尾の一族らから《教えの民》と呼ばれたように、毛の濃い巨大な二本足らを教導し使役して、遠からず再び各地に《石の都》を築いた。

夢視たちや占部たちは他の島や他の大陸にも生きのびた仲間があることを告げ、また《跳ぶ者》らが現われて、細々とながら互いの消息を繋いだ。

かつて焼失した《谷》の一族はその後《石の帝国》後期においては十または十二と言われる職能集団《色の七支族》に別れ、各地を流浪し、また分散して生活していたが、そのうちの造船と交易に携わっていた《青波の民》は、涙滴大陸の滅びにあたってもっとも生存率が高く、漂着した《沙の大陸》南岸に強堅な石造都邑の拠点を築くと同時に、あたう限り巨大な帆船を造りあげて、他の地に流された仲間達を訪れた。

大航海時代と、毛猿巨人たちとの交雑が同時に進み、やがて人々は広がり拡散し、海岸沿いにより良い気候の土地を求めて北へ北へと進んでいった。

それぞれの土地で異なる文化と言語に別れ、かつて同輩であったことを忘れ、あるいは現地先住民族と争い、旧大陸でのつながりは薄れていった。

２－１．『間隙時代』の変遷。

http://85358.diarynote.jp/201712032313307554/

２－１．『間隙時代』の変遷。

それから数万年が経った。

砂の大陸の先住民族であった旧石器人たちは涙滴大陸から持ち込まれた病やまた版図争いに破れ、伝説の中に「愚鈍な巨人」として語られるのみとなった。

また漂着した後もかたくなに「純血」を保ち続けた者らは「賢く剣呑な小人」族としてのみ名を残し、やはり多くの地においては伝説の彼方に没した。

早くから寛大な交雑混血を進めていった者らは広く栄え、あるは争いを避け、あるはまたより豊かな獲物や肥沃な土地を求めて、ちりぢりに増え広がり、その間に言語もまた文化や外見も離れていった。

涙滴大陸の歴史と悲劇の物語はただ「水に没した彼方の大陸」の伝説としてのみ残った。また、槍を持ち天空の城から降り立って人々を使役し苦しめた者らは、畏れをもって語られ、「天の神」という概念を形成するに至った。

大洋の孤島や多島海では、漂着した少数の者らがそのまま独自の文化を築いた。

長い長い時が経った。

人々は散り散りになりつつそれぞれの地で再び「古代文明」と呼ばれるにたる文化と建造物を築き、再び交易と混血の時代に至り、戦と婚姻が交互に行なわれ、国は統合され、文明は衝突しあった。

やがて涙滴大陸の伝承が再び発掘される頃、人々は複数国家間の大規模な戦闘を数度体験し、一時的に世界大戦を収める協約が結ばれた。

惑星をあらたに「地球」と名付け、ひとつの共存圏として複数の文化や言語や人種が共同統治を試みる時代に至った。

しかし、試みは試行錯誤のまま、祖語と破綻に終わった。

２－８．『最終戦争』

http://85358.diarynote.jp/201712252200103288/

ひみつ日記

２－３．《色の十支族》の拡散と他族の台頭

２－４．惑星上連盟の誕生と分裂。

２－５．アルヴァトーレと〈黄金のイルレアーナ〉

長らく惑星《地球》の衛星は《月》と呼ばれる１つだけであったが、ある時、２つに増えた。

《第二の月》と名づけられたそれはまさに地球に衝突せんとする小惑星を寸前で回頭させ、衛星軌道に乗せたものであった。

その行為を行った、主にＰＫ能力者らからなる集団は後に《アルヴァトーレ》と名乗る。

呼びかけ、率いた者は、《黄金のイルレアーナ》であった。

彼らは《ムーン ii 》の領有を宣し、地球圏における最初の宇宙独立国家となる。

２－６．【M．ＴＯＫＩ】プロジェクト。

アルヴァトーレの主導と出資により、軌道上に独立衛星都市《ポイントＰ》が置かれた。それは大学都市であり、地球圏の国家間の思惑を無視して、統一人類としての宇宙開発を目指す者らの集団であった。

特筆するべき学生に、M.T. ＯＫＩがいる。

彼は在学中より数々の発明品と特許で財をなし、その財を投じて次々と新造コロニーを、始めはオーダーメイドで地表からの脱出を求める富豪らのためのそれぞれの独立都市国家として造り、次には戦乱を逃れ安寧を求める中間富裕層のために《ＤＡＮ－ＣＨＩ》シリーズを展開した。

その富をもって彼は「全人類救済」を掲げたＮＧＯを立ち上げ、荒れる地球の沈む島嶼群に取り残された人々を無料で大量回収し、《ＷＡＧＡＹＡ》シリーズと呼ばれる量産コロニーに移住させていった。

２－７.《宇宙生活者連合》（コロニスツ）の成立

宇宙移住者の中で人数と技術力で主流派となったのが日系人であった。

その中から豪田行（ゴウダ・ユク）が立った。

宇宙移住者を糾合し、政体としてまとめあげ、《宇宙生活者連合》（コロニスツ）と名乗り、地表の各国に対し「対等以上」の地位を要求し、即時停戦を監視することを自らの任とした。

地表の戦乱は一旦収まったかに見えたが、地表環境の荒廃は、もはや止まらなかった。

２－８.『最終戦争』

《アルヴァトーレ》と《コロニスツ》の間でささいな分裂が起こった。

さらにそれをひき裂いて、新精力たる《青狼伝説団》が台頭した。

彼らは「保護のための地球遺棄」を宣言し、全人類の宇宙移住を強要した。

従わぬ者はことごとく抹殺され、それに抗ったのがキーヨ・エ＝ミーニアらであったが、「地表復元作戦」は強行され、全生命が一旦喪われた。

この時、全生命の大半は急造された宇宙船団で外太陽系へと旅立った。

《ムーン II 》は木星軌道に留まり、星系内惑星移住者も多く残った。

残りは地下都市に潜り、細々とのみ生き残った。

これが、「地球最終戦争」と、後の世に語られる物語である。

４　美麗天地の物語

４．《美麗天地》の物語

４．《美麗天地》の物語

３．美麗天地の物語

３．美麗天地の物語

３－０．《先史文明》遺跡

そも美麗天地には先人の都市遺跡あり。居住者なく、後人たちの到着時には、既に滅びていた、と言われる。

３－０－１．《ユヴァの猿族》

後人らより《ユヴァの猿族》と呼ばれる者ら惑星上にあり。言葉を持たず、文字を持たず、文化も持たぬと誤解され、当初は「類人猿なり。」と記録さる。

両性具有の群体として《思念共有》（ニワンサー）の力を有していたことが後に知られる。

遺跡都市の内紛滅亡時に争いを嫌って都を離れ野生に帰った人々の後裔、と理解された頃には後人たちとの交わりは断たれ、隠れた、または、滅びた、とされた。混血児の子孫らのみが遺され、後、その特殊能力を存続させるため少数民族として集められ、保護政策がとられた。

３－１．《星船》墜落。

美麗天地の後人らは《恒星間を渡る船》から墜ちた人々の子孫である。

一説には先人らはその落船の衝撃時に滅びた、とも言われる。

落船の子孫らは広く平坦な大陸部と多島海《ラクシャ・インストラ》に分散して墜ち、それぞれに０から文化文明を築きなおして再発展した。

ために初期文明は多文化多民族多言語空間の様相を呈し、「海峡を渡る」は「異文明世界に分け入る」と同義の危険をはらんだ。

３－２．初期《帝国》の成立。

大陸部に強国が建ち、いくつかの衝突と戦乱を経て《ラクシャ・インストラ》地域が併呑され、惑星全土が《ひとつの帝国》として緩やかに統合された。

３－２－１．《ナシルの谷》

帝国の有力者階級の子弟らと、平民階級から選抜された優秀な者らの最高等教育の場として「学都」（スレルナン）が制定された。

その中で一部の変わり者らが、与えられた官位を捨て、身分も性差もない「和合の暮らし」の理想を説いて、隠遁生活の村を創った。生涯不婚を許された別格公主アリンシ・エランの所領を恒久割譲され、《ナシルの谷》（エラン・ナシル）と名乗った。

後に惑星の正式名称となる《リスタルラーナ》は、この時、《ナシルの谷》を指して不婚公主の非公式な伴侶が詠った「リ・イス・スタル・アァルラーナ」（我らが麗しの天地よ！）が元であったと言われる。

理想と安寧の数代を経て、内乱時代に野盗に火を放たれ、土地としては滅びたが、その思想は残った。

３－３．後期《帝国》時代。

数百年にわたる内乱時代を経て再び統一帝国が建ち、平和政府の下、惑星全土がゆるやかに栄えた。

この時期、絶滅危惧種となった両性具有種《ユーヴェリー》らの末裔の「保護政策」が採られ、種の保存と普遍的人権の擁護を巡って、長らく論争が持たれた。

文化が普及し、科学技術が発展し、人々は生活に余裕を持ち、そして歴史に興味が向いた。

先人遺跡の探検と、合わせて《星船》伝説の検証が行なわれ、史実であったことがつきとめられ、ついに実物が発掘され、解析と研究が始まった。

３－４.《大崩壊》

それは突然だったと言われる。

惑星上のほぼ全ての生態系と文化文明とが、一瞬にして滅びた。

発掘責任者は直後に悲嘆にくれて自死したため詳細はつまびらかでないが、後世に往時の入力記録が確認された。

発掘隊は《星船》深部の「開かずの扉」をようやくこじ開けることに成功し、そこで提示された「光る文字」の、読めるようで意味の判然としない問いかけに対して、豪胆で知られた発掘隊長は、ただひたすらすべて「諾」の印を押し続けてみたらしい。と推測されている。

《星船》を統括する人工脳は問いかけていた。

「現住惑星を設定初期値の居住可能型惑星に再改造しますか？」

「現住惑星上に存在している全生命の保全は必要ないですか？」

「この選択を押すと警告なしに惑星改造が始まります。諾か？」

専門の高等教育を受けた少数の発掘技術者といささか知見の怪しい多数の自称考古学者とその昼食を手配していた家族の者らと天気の良い日にわざわざ地底の穴倉の遺跡探検と洒落こんだ物見遊山の好事家たち、わずか数千人のみを船内に保護して...

星船は埋まっていた地底の上の都市を瞬時に破壊して惑星重力圏外まで離脱し、即刻に「惑星改造」を開始した...

地表面は全て破砕され、微細粉末は分子原子のレベルで組み替えられ、「設定値ゼロ」の惑星表層改造が完了するまでの間、《星船》内でその報告映像を観続けることを強いられ人々は...

多くが嘆きのあまり狂死し、暴動が起き、荒れ狂い...

《星船》が再び地表に降り立った時、生き残っていたのは、数百人足らずであった...。

４．《リスタルラーナ星間連盟》の設立。

４－６．再起と開発。

「再改造」され尽した地表より奥深く、たまたま地底の《先人遺跡》の都市内にいた人々も原子分解の難を免れ、降りてきた人々と合流し、事実を知り、嘆き、そして再起の試みが始まった。

人々は「惑星起源伝説の再来だ...」と泣き笑いしながらよく働き、《星船》の自動機能を駆使して人工的な人口増大を図り、《星船》の提案に導かれるままに恒星間惑星開発に乗り出し、急激に増やされ過ぎた人口は更なる新天地を求め、近隣の小型惑星と大型衛星は、次々に「居住可能型」に改造されていった。

４－７．好奇と衝動。

人々は次々と与えられる「新しいもの」を喜び、「古いものを調べる」ことに極端な忌避を示した。

人種としての無意識集合体のトラウマが形成されたのである。

知的好奇心を満たすための学術教育は歓迎されたが、歴史や来歴を知る・学ぶなどの必要性はことごとく無視され、回避された。

記録は残されず、交渉もその場限りで、不足による争いが生じれば《船》に命じて、即座に新しい代替物が提供された。

４－８．忘却と忘失。

数代を待たず、人々は餓えも乾きも病も恐怖も死も忘れ...（加齢により死に近づいた人々は巧妙に隔離され、若い人々の眼からは消えた）。

その数５０００と概算される惑星と衛星と人工基地とに分かれ住んだ人々は、共通言語と軽佻浮薄な好事家、という文化的心理的特徴のみを共有し、常に新しい刺激を欲し、わずかでも人生に倦み退屈すれば、簡単に世界を拒絶し、しばしば（軽率にも）衝動的な自死を選んだ。

４－９．疑問と停滞。

「...なにかが、おかしいのではないか...？？」

そう呟いて立ち止る人々が現われ、この時に至って初めて「統一機構」が再結成され、有志による行政府が組織され、「リスタルラーナ星間連盟」と名乗った。

「行政」に関わる人々は、禁忌と忌み嫌われる「記録」と「計数」をしばしばとりたがるため、一般の人々からは「変人」と忌避され、「過去をほじくりかえして《大崩壊》の愚を再発したがりかねない、危険思想な人々」という認識すらなされる場合があった。

４－10．退屈と退廃

やがて多くの人々は、請えば次々と与えられる「新しいもの」が実は「いつか観たものの焼き直し」に過ぎない繰り返しだということに気づいてしまった。ひたすら新奇を求めることにすら飽き、無気力無関心の心の病が拡がった。

うわついた恋愛や結婚や家族という幻想が激減し、子どもや子育てという行為が魅力を持たなくなった。

自然人口は激減の一途をたどった。

みずから「行政」に関わろうとする生存欲の強い少数派の有志がこれを憂い、個人の希望ではなく「行政の意志」として、星船の自動機能から「人工繁殖機関」を独立させ、養育施設を工夫し、減り続ける自然人口に対して穴埋めの「育成人材」を増やし続けた。

４－Ｘ。《テラザニア》発見。

そんななか、最初期型の「育成人材」の一人であり、星間科学者マリア，オードら夫妻の養子でもあったマリア，ソレル女史が、辺境星域探査中、星腕影の暗黒の彼方に別文明《テラザニア》を発見、調査を開始した。

この情報は極秘裏のうちに上部会議にかけられ、「文化衰退抑止のための人心起爆剤」と認識され、大規模な「開国促進キャンペーン」が始まった。

5　地球再統一

５．地球再統一

５．《地球》再統一

５－１.《 地球 》再統一。

５－１.《地球》再生。

杉谷好一と《滅びの狼》らによって一旦は無生命の場と化した惑星《地球》であったが、ごく浅い急造地下シェルターの耐用限界を迎えて数十年後には地表に戻り適応せざるを得なかった人々を端緒に、同じく戦乱で破損し老朽化した移住衛星から降下する人々も増え始め、過酷な環境に耐え、より生存に適した土地を求めて争いあう戦乱の世が始まった。

５－２．統一の試み。

生き残った人類らが愚かにも同じ歴史を繰り返そうするを憂い、地表の統一と平定を試みた者がいくたりかある。

教化と技術文化の統制により《北方国》をまとめたリースヒェンソルトと、南西諸国を停戦講和に導いたマリーアン・ド＝リームの功績が特に大きい。

しかし時いまだ至らず、再び世は乱れ、人心は荒廃した。

５－３.《救い手》リースマリアル。

《迎夢者たち》を率いて、少女リースマリアルが世界統一に立った。

「戦わない、殺さない」を掲げて彼らは歌舞音曲と防護技術のみをもって各国軍を幻惑し篭絡した。

５－４．《草莽の民》併合。

リースマリアルの没後も《迎夢者たち》によって倦まず続けられた進化論的積極平和主義のもと、地表西方諸国がおおむね束ねられた後も、宗旨と世界観の異なる東方諸族は「言語や文化をも含む統一の強制」を硬く拒んだ。

強硬派による「武装国境線」封鎖論をなだめるために派遣された全権大使ヨセフィア・アークタスに対する、巫女王サエム・ランの降嫁、という劇的な形で、その分裂は回避された。

５－５．《テラザニア》成立。

数十年の時をかけて無力化され尽した各国と諸族は講和の席につかざるを得ず、紛糾の末、その会議は《地球系星間（全居住可能圏）統一連邦》と定められ、略称を《テラザニア》と決めた。

普遍的人権の絶対護持のみを唯一の統一点とし、その他あらゆる文化と価値観の多様性共存を、第二の旨とした。

５－６．第一種接近遭遇。

細則について常に会議が紛糾を続け、幾度も破断分裂再抗争と危ぶまれるなか、突如、「第一種接近遭遇」の報が辺境星域からもたらされた。

《リスタルラーナ星間連盟》からの、一方的かつ強引な開国要求である。

短時間のうちに開国友好派と猜疑心に満ち溢れた撃退派の大論争となり、人心は千々に乱れ、巷に暴動があふれた。

リースマリアル亡き後の「統一の象徴」の一人と崇められていたサエム・ランが運悪く暴動に巻き込まれて危篤。胎内の第２子も危ぶまれる...との速報で暴動は一気に沈静化し、悲嘆と祈りの時に変わった。

この時リスタルラーナ全権大使ケティア，サークの機転と同行者ソレル女史の技術力により一命を救い、母子ともに無事生還。世論の爆発的な歓迎を得て、開国と友好通商が決定した。

これを記念して《地球圏統一暦》は《星暦》と改められた。

6　３界の物語

６．三千世界の物語

６．三千世界の物語

６．《三千世界》の物語。

６－１．友好通商時代。

《地球》～《リスタルラーナ》の友好通商条約は短時日のうちに結ばれた。

地球人が新たに急激に流入してくる技術文明と生活物資の吸収にいそしむ一方で、退屈しきっていたリスタルラーナ人種は狂喜して、未知の文化文明についての知見を求めた。

地球人が「歴史と伝統」や「過去の教訓」という概念を大事にする点は《美麗天地》世界にかつてない斬新さと感じられ、驚きとともに人々は貪欲に「もっと沢山！」と文化娯楽産物の移入を期待した。

慌ただしく交換留学生が行き来し、急激な交流に伴って、事件や混乱も生じた。

６－２．《三界》交渉。

ほどなくして第３の異星文明圏《ジレイシャ＝アンガヴァス星間帝国》との遭遇があり、三国間での開国条約交渉が始まった。

やがて、互いに自然交配が可能なほどに近似した遺伝子と外見と、いささかならず共通性のある文化的背景や概念を持ち、しかしながら歴史と年表をいくら逆算し精査しても、一体どこでどう分岐した「同族」なのかが、いまひとつ確定しがたい...という大きな謎が発した。

ここから、３文明圏には空前の歴史と考古学のブームが興った。

（幕間劇　４）

（幕間劇４）

（幕間劇４）

7　ジースト世界の物語

7．《ジースト》の物語

7．《ジースト》の物語

－ THEAST the BEAST －

（※）

（※ 別巻にて詳述。）

８　銀河統一の物語～エリスウェサ体制まで

８．《統一銀河》の物語

８．《統一銀河》の物語

－《エリスウェサ体制》まで－

８．《三千世界》時代。

８－１．《三千世界》時代

リスタルラーナ《行政府》や、地球《迎夢者たち》の統制をはるかに超えて、ジレイシャ＝アンガヴァス帝国の反政府勢力である《ジースト・ゼネッタ》らが絡む犯罪組織が拡大し、その対応への必要性から、早期に３世界の各行政組織は連携化が進んだ。

やがて第一次～第三次の《２連》vs《ジ＝ス》帝国戦役と、ゼネッタ武装革命による帝国瓦解を経て、「長すぎた蜜月」と呼ばれる低迷と治安混乱の千年期を過ごした後、初代大統領エクウス・ライノーツがまとめる形で、３世界は公式に統合された。

通称《リス・テラ・ス》と呼ばれたが、おのおの千に及ぶ自治星系を内包していたことから、地球系古語をとって《三千世界》とも称された。

８－２．《 汎 銀河 協商 》加盟。

この時、３世界統合と同時に「一銀河一政体」の形成とみなされ、高次元統制府である《汎銀河協商》より、初級加盟国として初めて認定された。

航時航次元技術の移入が許可され、異星系からの異なる外見と生態系の知的生命体らが公式に訪問し個人旅行が行なわれるようになった。

また、望めば《リステラス》銀河人が他銀河系や異次元・高域次元世界へと訪問することも可能になった。

８－３.《 壁 》の発生と世界の崩壊。

しかしやがて世が乱れ航時機等を悪用する犯罪が多発し、その取り締まりのため官憲は監視体制を強化した。

「似非平和と悪平等」を嫌うジースト系市民が大規模な反乱を起こし、銀河の一端を斬り取る形で《壁》を築き独立を宣した。

リステラス政府はこれを「自治領」という体裁で容認し、当初は慰撫懐柔に努めていたが和平案を悉く拒否され、「内乱制圧」の名目で全軍出動の事態と相成り、両陣営から多数の死傷者が出た。

この時、無様かつ杜撰な作戦立案を強行し「味方殺し」と呼ばれた軍官僚らが、敗走責任を問われ、全銀河放映の場で公然と敗軍の将リエン・ドレングスンから殴り飛ばされた逸話は、あまりにも有名である。

その後、「良心派」と呼ばれたルー・ウェイファンらの奔走も虚しく《 壁》は強化され、銀河文明の二分は決定的なものとなった。

遺された《リステラス》領域では監視体制が強化され、近親者一族による独裁化が進んだ。

《汎銀河協商》はこれを政体の退化とみなし、航時権の剥奪を宣言し、異銀河生命体らは公式には全て退場している。

（幕間劇　５）

（幕間劇５）

（幕間劇５）

９　リズから外へ　～　末法宇宙の物語

９．《リズ》から外へ。

９．《リズ》から外へ。

...《末法宇宙》の物語...

９．《リズ》から外へ　～　末法宇宙の物語。

９－１．《エリスウェサ体制》

その一族の髪の色から「銀の時代」とも呼ばれた《エリスウェサ体制》が長く続いた。

選別遺伝子による徹底的な階級差別を含む管理監視社会は、抑圧された人々に対して過去への郷愁をかきたて、歴史愛好家（イロニナンズ）はひとつの社会勢力を形成するほどの思想的背景となった。

憧憬と厭世観のあまり、今や違法となった航時機や次元移動機の不法所持による他銀河や異次元空間への逃亡が、ひそかなムーブメントと化した。

９－２．監視と逃散。

育成に時間のかかる「高次脳機能力強化階級」ほど逃亡が激しかった為、人口の維持に危惧を覚えた《エリスウェサ》行政府は、逃散した人々の呼び戻しのために惑星私有や星系自治権の認可など、大幅な妥協と規制緩和を開始した。

９－２．惑星独立運動。（革命）。

許可された惑星私有は夢と混乱を産んだ。苦労して入植した後に圧倒的な軍事力と通商管理権を楯に自治権を制限される例が相次ぎ、「惑星の自主独立」を唱えて造反する政体が相次いだ。

混乱に乗じて星間航路には宇宙海賊や人身売買が横行し、治安状況は暗黒時代と化した。

９－３.《星海王》と《航路遮断》

星間海賊があまりにも跳梁跋扈したため銀河の端と端では情報も物資も互いに届かない、宇宙においては命も人権も保障されない、治安崩壊の時代となった。

富裕層と商業勢力はこれを危惧して「宇宙空間を経由しない交易通路を」と要求し、開発部は残された次元移動技術を応用して「星間トンネル」網を整備した。

富裕権力層は犯罪と汚濁を恐れ、下民どもからは「穴ぐら」と蔑称されるトンネル都市の擁壁の中から出ることはなくなった。

「下民ども」は監視を解かれたことを喜び、自由と混乱の末法の世を生き残れる者だけが自然交配によって子孫を残した。

遺伝子補修管理技術は「穴ぐら」の中に喪われ、無事に生まれ育つ優良遺伝子の子らは次第に減り、星間人口の漸減が進んだ。

「上内界」と「下外界」の二分化が完了し、ここに《リステラス》統一銀河時代は終わりを告げた。

（一旦の終わり）。

X　終わらない物語

（※）

（※ 別巻にて詳述。）

（草稿＆没原稿）

（草稿＆没原稿）

（草稿＆没原稿）

（元原稿）

https://puboo.jp/users/masatotoki?p=1

『試験に出る宇宙史』／【INDEX】　（2015年4月9日）

http://85358.diarynote.jp/201504091810155404/

http://85358.diarynote.jp/201504091810155404/

2015年4月9日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 http://85358.diarynote.jp/201504091810155404/

http://diarynote.jp/data/blogs/l/20150409/85358_201504091810155404_1.jpg
http://diarynote.jp/data/blogs/l/20150409/85358_201504091810155404_2.jpg
http://diarynote.jp/data/blogs/l/20150409/85358_201504091810155404_3.jpg

...筆が進まないわけだよ...（－－；）
「作者も知らない裏設定」が、
あ～んなに！ テンコ盛りだったなんて...
...＜（ーー；）＞...

https://www.youtube.com/watch?v=xqZyTOOGUrM
Kagrra (神楽) - [渦]

>『試験に出る宇宙史』／【INDEX】
>
>（出題１）下線部分にリステラス共通歴の年数または年代を、
> 二重下線部分に当該地域固有歴の年月日を入れよ。
>
>

>【先史代】
>
>《センサリーテヤ》
>
> 太祖〈マンマ・ワァガ〉、教都《センサ・リテリーヤ》において《最期の四下界》を創設。
>
> 四下界暴走。センサリテヤ《中央大都》滅亡。生存者は上界へ。
>
> 各星雲の古代都市群、順次衰亡消滅。
>
>
>
>【四界代】
>
>《エルシャムリア》
>
> 主宰〈リーシェンサラル〉学究界を開く。
>
> ボルドガスドム軍、襲来。
>
> 主宰神還命。学究界閉鎖。生存者は上界または地平界へ分散移住。
>
>
>《ボルドガスドム》
>
> 勝者〈グァヒギルグ〉争鳴界を開き八部軍を定める。
>
> エルシャムリア襲撃。
>
> ダィレムアース侵略。
>
> 上界審〈レリナルディ〉による強制武装解除。〈グァヒギルグ〉永久幽閉。
>
> 八部軍将による争鳴野合時代。
>
> ダィレムアース再侵攻。
>
> 界境自重壊により滅亡。生存者は地平界または地球界へ。
>
>

＞《ダィレムアース》
＞
＞ 女神〈マライアヌ〉、大地平界を開く。
＞
＞ ボルドガスドム来襲。女神永眠。神々大地を離れる。
＞
＞
＞〈女神の娘〉と子孫らによる【人間の時代】。
＞
＞〈女神の遠き孫〉、分散移住し互いに孤立化した人間文化圏をひとつにまとめ【大地世界】を名乗る。
＞
＞《白王都》建都。
＞
＞《正皇家》争い。
＞
＞《西皇都》建国。【交易時代】始まる。
＞
＞ ボルドガスドム再襲撃。《白都》落城。
＞
＞〈皇女マーライシャ〉率いる大地軍、ボルドガスドムを撃退。
＞
＞ 大地衰亡。生存者はティカーセラスへ。
＞
＞
＞
＞【孤界代】
＞
＞《ティカーセラス》
＞
＞《太古海代》原惑星《テイカース》に水界《セラス》衝突。大海星となり生態系発展。
＞
＞《水の嶋》乾地形成。生命上陸。
＞
＞
＞《水の大陸》乾地広がり南方中心に原生態系発展。
＞
＞《谷の一族》中部山中より〈避難者〉来たり北西《谷筋》に移住し拡散。
＞ 先住人類に文化技術を伝える。
＞

＞《碧葉国》宙天より星船落下。生存者、大陸中部東岸に都邑国家を建設。
＞ 先住人類に文化技術を伝える。〈月女神〉信仰起こる。
＞
＞《南帝国》先住原生人類、部族抗争のすえ統一国家を樹立。政情安定せず。
＞《碧葉》《谷》に対し貢納服従を要求。
＞
＞ 大震発生。《月山脈》隆起。大陸の主要交易路分断。
＞
＞《西の谷筋》、噴火流により居住不適地となり一族流浪化。
＞ 結束固く《白の一族》を名乗る。海洋河川交通網発展。
＞
＞
＞《帝国》、婚姻政策により碧葉国を併合。大陸統一を宣す。政情安定せず。
＞
＞「男尊女卑」という新思想発生。
＞
＞「三親の法」流布する。
＞
＞ 大震災。天変。農耕壊滅。新帝立つ。
＞
＞ 大遷都。大陸北端《石の都》建設。文明全盛。
＞
＞
＞《天軍船》来襲。帝都制圧。固有文化壊滅。
＞
＞ 天帝圧政、先住人類奴隷化。全人種の混血化。純血種の減少により天族の支配力弛む。
＞
＞《西方都市》軍、天帝都市攻略。
＞「四民平等」「女尊男尊」思想の再建による拡散共栄時代。
＞
＞《天軍船群》墜落。
＞ 大陸全土が居住不可となり生存者は海路をへて未開の別大陸群に散る。
＞
＞
＞
＞【五大陸分散期】各大陸各地にて人類生存、分化発展。
＞（※各文明圏史・地方国家内史は別巻参照）
＞
＞ 群雄割拠。武装集団ごとの機密保持の必要性による共通言語の喪失。
＞

>《白の一族》とその分派《色の七支族》指導による孤立文明間の遠距離交易始まる。
>
> 各大陸複数国家群生代。侵略と独立、圧政と蜂起の戦乱相次ぐ。
>
> 政治産業改革。第一回全国家間協議会。国際商取法成立。
>
> 第一次大陸間大戦。停戦。第二回全国家間協議会。
>
> 第二次大陸間大戦。終戦。第三回全国家間協議会。これより常設定例議会となる。
>
>《東神帝国》、国家協議会離脱。《汎東海神国》建設を宣し、沿岸国家へ侵攻開始。
>
>《第二の月》、母星衝突回避し、衛星軌道に固定。《アルヴァトーレ》が領有を宣言。
>
> 第三次大陸間（熱核細菌化学兵器）大戦。軌道衛星への一般避難民の受け入れ開始。
>
>《宇宙移民連合》独立宣言。
> 各国軍攻撃衛星群を支配下におき母星上全勢力に対し全武力抗争の即時停戦と全武装解除を要求脅迫。全戦域での停戦監視成立。
>
>《月都市》と《母星上全国家間再建協議会》による人類共同統治。
> 計画的「全人類」宇宙脱出計画始まる。
>
>《人狼団》による生命圏テロ。母星地表上全生体死滅。母星軌道上より人類過半が離脱。
>
>
> 他星系遠距離移民用各船団、ほぼ同時期に音信途絶、探知網より消滅。
>
> 火星移民船団、内部分裂。半数が地球軌道上へ帰還。
>
> 金星移民船団、全滅。
>
> 木星以遠衛星圏移民船団、順調に居住空間を確保。
>
>《宇宙移民連合》再建承認。普通選挙による議会制民主主義制度の復活。
>
>
> 母星地底避難施設ならびに火星移民団帰還船より生存人類が地表に戻り始める。
>
> 各地で小規模な民族集落・都邑国家建設。

>
> 大陸３版図敵対時代。
>
> 第一次地表再統一運動。〈リームのマリアン〉西圏を統一。
>
> 第二次地表再統一運動。〈リースヒェン・ソルト〉暗殺による北方統一の頓挫。
>
> 第三次地表再統一運動。《遊戯者たちの逃走闘争》始まる。
>
>〈リースマリアル〉、《非暴力不服従徹底口論》を掲げて地球再統一会議開催。
>
> 地球統一連合《テラザニア》成立。
>
>
>
>
>《リスタルラーナ》
>
> 先史文明都市滅ぶ。《ユヴァの猿族》、廃都より離れ「野生生物」として生き残る。
>
> 星船不時着。生存者、次第に広がる。（稀にユヴァとの混血発生。両性具有／精神感応者の因子が残る）。
>
> 現存人類文明時代（第一期）、多島文化共生。境界海峡の干拓化進み、交流と統一進む。
>
> 星船遺跡発掘中、先史文明惑星改造機の誤作動により母惑星上の生命全滅。
>
> 恒星間流浪〜開拓時代（文明第二期）。
>
> 恒星間国家紛争時代（文明第三期）。
>
>（文明第四期）。政情固定化の一方、人口増の停止。自然出生児数が激減。集中管理体制始まる。
>
>《テラザニア》文明圏を発見。国交開始。
>
>《テラズ・リスタル》協商時代。
>
> 両界統合。《リス／テラス星圏》統一政体の樹立。
>

>
>
>《ジレイシャン》
>
> 二連惑星《ジースト》と《ゼネラ》に星船墜落。相互の連絡途絶のまま、生存発展。
>
>
> 惑星ゼネラ、技術文明発展。発電所の暴発事故により惑星全土寒冷化。人口激減。
>
>「念力」を持つ子ども増える。迫害により僻地へ逃れ集団形成。《ゼネッタ》と名乗る。
>
>
> 惑星ジースト、小国分裂。熾烈な覇権争いの末、独裁帝国《アンガヴァス》による統一達成。
>
> 遠視鏡による《ゼネラ》観察。航宙技術開発。《ゼネル》と《ゼネッタ》の生体を捕獲研究。
>
> 帝国軍船によるジースト侵攻。奴隷労働力としてのゼネッタ集団略奪はじまる。
>
> 近隣恒星系に版図拡大。《ジースト＝アンガヴァス星間帝国》を名乗る。
>
> 奴隷制支配下の《ゼネッタ》内に反帝政組織発生。自治領《隠れ里》確保。
>
>
>《リスタルラーナ》政府、《ジースト＝アンガヴァス》政府に対して国交交渉を開始。
>
>《隠れ里》政府による一斉反撃。革命成功。自由民連合《ジレイシャン》と名乗る。
>
>《アンガヴァス》勢力による反撃開始。《ジレイシャンガヴァス》内戦が長期泥沼化。
>
>《リス・テラス》統一政府による強制停戦。事実上の併呑。
>
>
>
>《リス・テラス》
>
>《リズヴェッサ》
>
>《リズ》

>
>
>《汎銀河協商》
>
>《外銀河星海》

☆検索おまけ☆
https://www.youtube.com/watch?v=TjIGFaZRTJ8
ECP-0019 uzu（打楽器 4 重奏）

https://www.youtube.com/watch?v=ngxnGSLnx9k
おすすめフリー音源「渦巻き」疾走感素材 甘茶の音楽工房

https://www.youtube.com/watch?v=KoJFvBgsWo0
【風神録ボーカル】UNDEAD CORPORATION - 渦

わぁ☆（＾◆＾；）★

https://www.youtube.com/watch?v=LgZ8iv7AZcc
嵐 スパイラル PV 風

＃＃＃ コメント

http://85358.diarynote.jp/

http://85358.diarynote.jp/

2015 年 4 月 9 日 18:43

cmk2wl @cmk2wl
ů 9 時間 9 時間前
「深海に生きる魚族のように、自らが燃えなければ何処にも光はない。」
明石海人（ハンセン病の歌人、37 歳で早世）

ヤツリーダムの伝承歌　1

神は無慈悲で浅慮であった。
＼[重さ＼] という名の罠をはり、
すべてのものを閉じこめた。
雑にまるめた泥団子の上に。

ひとつの大きな氷精が
＼[重さ＼] の罠に捉えられ、
泥団子に墜ちた衝撃で
砕け四散し滴となった。

罠の虜囚の全てのものが
水精たちを犯し喰らった。
さまざまな者に犯されて、
さまざまな子を水は産む。

無力な小さい水の子が、
＼[空の王＼] から犯された。
これがわれらの母である。
われらを産んだ母である。

ヤツリーダムの伝承歌　2

《空の王》から犯されて
《水の娘》が生んだ子は
水気を吸うこと能わずに
ははのなかでは溺れ死ぬ。

母は困って必死になって
泥をこねあげ押し上げて
小さな小さな突起を作り
子たちを水より外に出す。

すると無慈悲な風が来て
子らは今にも乾涸らびる。
母は困って雲靄となって、
ひよわな子らに被さった。

それを見かけた《空の王》
あまりに惨めで見苦しい、
わが子と呼べぬと罵った。
嘲りムチ打ち踏み敷いた。

ヤツリーダムの伝承歌　3

子らを庇って打擲されて、
泣き叫ぶ母をひきはがし、
マシな子種を仕込もうと、
父は無理矢理連れ去った。

母たる庇護をうしなって、
たちまち干上がる水の島。
母の残したなみだの沼に、
むらがり怯える水の子ら。

熱になぶられ風に曝され、
無力な命は外から消える。
飢えて乾いて塵に帰って、
狂って暴れて泣いても死。

きづいた時にはただ一人。
とり残されたるただ一人。
それが我らの始祖である。
我らの哀しい始祖である。

ヤツリーダムの伝承歌　4

いちばん弱くて
いちばん小さい
いちばん守られ
いちばん真ん中

いちばん最後に
とりのこされて
いちばん寂しい
いちばん悲しい

うえておびえて
とりのこされて
ないてさけんで
あにあねをよぶ

するとこたえて
いちばん大きい
みはりにでた兄
まだ生きていた!!

ヤツリーダムの伝承歌　5

あえて嬉しいと、
弟は心底思った。
その水を寄こせ！
と、兄は叫んだ。

《いちばん弱い》が守られていた、
《ははのなみだ》のさいごの沼の、
ちいさなからだのちいさなかげの、
さいごにのこったどろみずだまり。

それを寄こせ!!と兄は叫んだ。
狂った顔して、突進してきた。
奪られたら死ぬと弟は思った。
怖くてその後、覚えていない。

よろめくからだにつめのないうででくみついて、
さけぶあいてのはなをまだみじかいおでうって、
ひびわれたはだにきばのないくちでかみついて、
くちのなかにしみでたちのあじに歓喜し叫んだ。

「 お いし い 」. . . . . !!!!

ヤツリーダムの伝承歌　6

そしてきづいたときにはただひとり。
そらは蒼くてくらくてがらんどうで。
すべてのものがにくくて悔しかった。
たべられたほうがましだったはずと。

はやくしにたい。
はやくしにたい。
はやくしにたい。
はやくしにたい。

いちばんよわいはよろぼいあるいた。
ははのなみだにあたいもせぬおのれ。
あにのちのしみからさまよいはなれ。
てんなるちちよはやくきてころせと。

するととおくでひくくうめく声がする。
あにあねのむくろにうもれすすり泣く、
いちばんよわくていちばんあいされて、
かばわれむくろのかげにまもられた牝。

ヤツリーダムの伝承歌　7

いのなかみをすべてはきもどしてたべさせた。
いのちがけでおしてひいてさいごの母の涙へ。
おおいかぶさり天のにくい光の矢から守ろう。
このめすだけはじぶんよりはやくは死ぬなと。

めすはいのちをふきかえし、
ひびわれたこえで細く言う。
このかゆは姉者の味がする。
このみずは兄者の味がする。

やがてようよう母が戻った。
なぶるに飽いた父の元から、
はらんだ腹で逃げて戻った。
そしてみつけるわが子の姿。

ヤツリーダムの伝承歌　8

水の初子の弟妹は、
やはり水気は吸えねども、
父に良く似た傲慢で、
二足で歩いて広がった。

増えて広がりこれでは狭いと、
埋めよ増やせよ《水の島》。
ならねば母をも呪おうぞ。
憎むと脅して使役する。

水の初子の子どもらは、
いついつまでも悲しんで、
哀しみの泥をはい回り、
やがて母なる海へと還る。

母なる水はもう二度と、
天の子生まぬと決意する。
かなしみひしがれ重さのあまり、
死ぬることさえ奪われた。

（設定資料）

（設定資料）

（設定資料）

（借景資料集）

（借景資料集）

（借景資料集）

（借景ＢＧＭ集）

http://85358.diarynote.jp/201704261823075881/

http://85358.diarynote.jp/201704261823075881/

http://85358.diarynote.jp/201704261823075881/

奥付

奥付

「あらすじです。」

（宇宙史）

（リステラス星圏史略・第１部）

（草稿＋没原稿〜第１稿）

（講談社投稿用）

（２０１８年）

../../book/117527

☆ 著者 ☆

霧樹 里守

（きりぎ・りす）

著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
../../book/117527

電子書籍プラットフォーム：パブー（https://puboo.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

「あらすじです。」　（宇宙史）（リステラス星圏史略・第１部）（草稿＋没原稿～第１稿）

著　　霧樹 里守（きりぎ・りす）

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社